

時論公論 IV

至難な野党再編

——自民党結党に学ぶ

政治アナリスト
元杏林大学教授

豊島典雄

自民党は成功した唯一の新党

自民党は戦後誕生し、成功した唯一の新党と言える。昭和30年（1955年）11月の誕生から63年間、還暦を経て政権の座にある。野党の強力な新党結成に、敵である自民党から学べるものがあるのではないかと？

昭和20年代後半の日本の政界は自由党の吉田茂と、反吉田茂勢力を率いる鳩山一郎の凄まじい権力闘争に明け暮れていた。保守党として、保守層という有権者を取り合う近親憎悪の関係であった。鳩山は謀将の三木武吉や河野一郎に支えられながら、吉田茂内閣打倒に血道を上げていた。

「吉田対鳩山両派の相克は、……：……とかく政策拔きの争いに見られがちであるが、路線面からみれば吉

田の対米協調・経済重点主義を修正しようとする動きであったと見ることができ」（富森勲児著・戦後保守党史）。

昭和29年末に長期政権の吉田茂内閣も終焉し、吉田茂は自由党総裁のポストも辞した。日本民主党の鳩山一郎内閣が誕生したが、少数単独内閣で政権運営に苦慮していた。

そこで、同じ保守党である自由党（緒方竹虎総裁）と日本民主党（鳩山一郎総裁）の保守合同が求められた。

米国も保守合同に期待

昭和30年8月末にワシントンで行われた、日本の重光葵外務大臣と米国のダレス国務長官との会談に出席した日本民主党の岸信介幹事長や河野一郎外務大臣が、ダレスから「日本における保守勢力を団結させ、統

一行動を發展させることが必要だ。この方向で事を進め、近々これが成功することを希望する」と保守合同への期待を表明された。

「同会談でダレスは、米ソ冷戦激化のなか共產主義に対する防壁としての『強い日本』を要求するが、この『強い日本』を構築するための『強い保守』、すなわち保守合同による保守単一政党結成への期待を岸らに直接表明したことの意義はいたって重大である」（原彬久著・岸信介―権勢の政治家）。

財界の圧力も

財界が保守合同を望んだ背景は何か？高度成長の環境作りのための政治の安定と政治資金ルートの二本化である。

「第二に朝鮮戦争で復興の糸口をつかんだ日本経済は50年代に入って高

度成長を向かえようとしており、日本経済を膨張拡大してゆくために、何よりも政局の安定が必要とされた。保守が分裂して互いに足を引っ張りあい、その間隙を縫うように両派社会党がギリギリと力をつけてくる情勢は財界にとっては安心のならぬものであった。

55年1月31日、財界は保守合同にさきがけて、経済再建懇談会をつくり、資金ルートの財界側の窓口の一本化をしたわけである。その次の段階として、財界側が資金を受けとる政界側の二本化を要求したのは当然の成り行きであった」（富森勲児著・戦後保守党史）。

世論の支持

世論も二大政党制を求めていた。岸信介も「やはり、ひとつには歴史の流れ、時代の要請が保守合同を求め

ていたといえる。つまり二大政党対立制の待望論それが国民世論としてあった。だから、あの理屈の多い左右社会党が統一されるなどという放れわざもできたものだ。世論のバックがなければ一緒になれるわけがない。

保守合同もそうだ。保守陣営の中で沸き上がってくるエネルギーと、外からそれを望む機運がひとつに重なって保守合同ができた。」（前掲の自由民主党編・自由民主党史 証言・記録編）。

三木武吉の捨て身の説得

保守合同Ⅱ 日本民主党と自由党の合同による自由民主党の結党は、人材に恵まれていた。特に日本民主党総務会長の三木武吉と、自由党総務会長の大野伴睦である。二人は不倶戴天の敵という間柄であった。

三木は新聞記者を使つて30年5月に大野に会談を求めた。

保守合同もそうだ。保守陣営の中で沸き上がってくるエネルギーと、外からそれを望む機運がひとつに重なって保守合同ができた。」（前掲の自由民主党編・自由民主党史 証言・記録編）。

天地神明に誓つて私利私欲を去り、この大業を成就させる決心だ。くどいようだが、今度こそ術も施さなないし、策もめぐらさない」と説いた。百術は「誠に如かず。

すでにガンに冒されていた三木の
捨て身の得であつた。

大野は「だまされまいとの用心は吹き飛んであの爺さんの誠意に打たれた。長い間の交渉を通じて三木君は終始真剣そのもので、私は最初から最後まで三木君の真実を信じ通した。そして三木君は片言隻句も嘘を言わなかった。三木君の行動は全く無我に近く、やはり死期を前にして自覚した三木君は仏様のように研ぎすました心境になっていたように

思われる」(三木会編『三木武吉』と語っている。

胆力のあるこの三木と大野のホツ
トラインが、その後実現した保守合
同の要の地位を占めたのである。

岸信介も「この二人の総務会長がいなかったら、どんなに内外の諸条件が円熟していても、保守合同があのよう to 実現したかどうか疑わしい」と断言している。

左右両派の社会党の統一が昭和30年10月に実現したが、保守合同への最大の圧力となった。

三木武吉は、鳩山ブーム下であつ

たにもかかわらず、30年2月の総選挙で、日本民主党が伸び悩み（185議席）、過半数を取れなかったばかりか、左右社会党に労働党を加えたオール社会党が改憲阻止に十分な160議席を得たことを深刻に考えた。その左右両派の社会党が統一した。

「保守勢力の分断確執によって失わずともすむ議席を失い、それがたゞめ憲法改正の機会を永久に失う。今二つは社会党発展に内包する容共勢力の進出である。……………憲法改正

は占領政治修正を断行する出発点なりと三木も鳩山も信じている。選挙の足取りはそれを不可能ならしめる傾向を示している。余命の短いことを自覚する三木としては、保守結集を急がざるを得ない」(御手洗辰雄著・三木武吉傳)。

結党時の政綱は六項からなり、第六項では、「現行憲法の自主的改正をはかり、また占領諸法制を再検討し、国情に應じてこれが改廃を行う。世界の平和と国家の独立及び国民の自由を保護するため、集約的安全保障の下、国力と国情に相応した自衛軍備を整え、駐留外国軍隊の撤退に備える」とした。6年8ヶ月の連合国の占領政治への国民の反発は強いものがあつた。占領政策の是正が大義であつた。

今 政権交代の兆しが見えない。
野党は政権交代を求める大義名分、
旗を提示できるだろうか？

世論の期待はどうか？強力な支援団体があるか？

維新回天の人材はいるか？
保守合同から何を学べるか？